

NETWORK

- 地元の魅力を伝え、素材を生かす！  
 ～平戸松浦地区観光人材育成事業報告～ ..... 2
- 京築地域のブランド戦略づくり  
 ～京築連帯アメニティシンポジウムの報告～ ..... 4

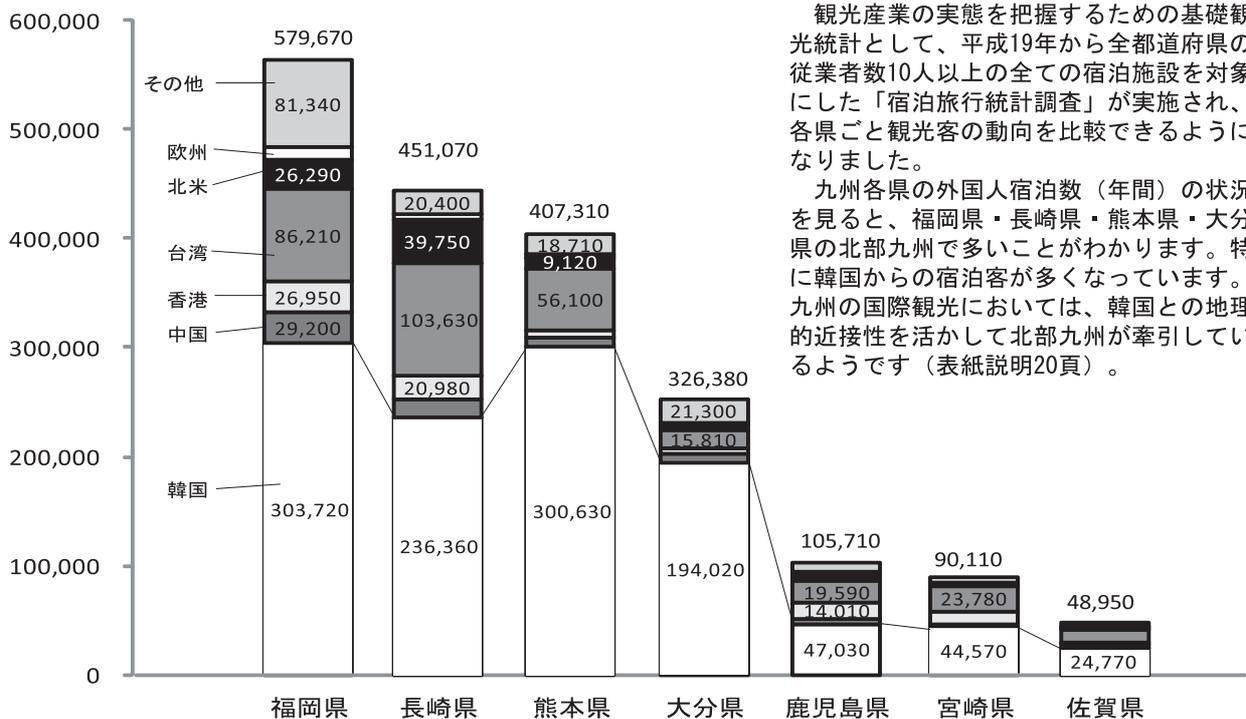
見・聞・食

- 観光と修行——四国の遍路道を歩きながら考えた  
 四国遍路の地域経済学・提言……遍路報告第2回 ..... 6
- 屋外広告物について考えるー2  
 主要交差点における違反屋外広告物を撤去している  
 佐賀市の取り組み ..... 10
- 高齢者の安全・安心の住まいをボランティアで支え続けて14年  
 ～高齢者住宅環境整備ボランティア会～ ..... 13

近況

- 練馬区の農家レストランみやもとファーム ..... 15
- 初盆に家の前庭で、集落の人々が盆踊り ..... 17
- 全国のおチョコボレ青年諸君、人に喜ばれる仕事をして、自立しよう  
 高齢者と若者の心をつなぐニュービジネスづくり ..... 18
- 京都をぶらり ..... 18
- 富士山に登りました ..... 19
- パソコン災難に国際連携その2  
 コールセンターという国際労働市場 ..... 19
- 表紙説明 ..... 20

○北部九州が牽引する国際観光



観光産業の実態を把握するための基礎観光統計として、平成19年から全都道府県の従業者数10人以上の全ての宿泊施設を対象にした「宿泊旅行統計調査」が実施され、各県ごと観光客の動向を比較できるようになりました。

九州各県の外国人宿泊数（年間）の状況を見ると、福岡県・長崎県・熊本県・大分県の北部九州で多いことがわかります。特に韓国からの宿泊客が多くなっています。九州の国際観光においては、韓国との地理的近接性を活かして北部九州が牽引しているようです（表紙説明20頁）。

国土交通省：九州「宿泊旅行統計調査（平成19年）」

## 地元の魅力を伝え、素材を生かす！

～ 平戸松浦地区観光人材育成事業報告～

雪丸 久徳、愛甲 美帆

【わかりやすく、かつ、魅力的に伝える言葉の奥深さ・難しさを思い知った！

お客様を動かす「商品表現術」】

ここ数年、長崎県平戸松浦地域や福岡県の京築地域など、加工品づくりの現場に足を運ぶことが多い。加工グループのほとんどは、おばちゃんたちである。その土地の山の幸・海の幸を使って、時間をかけて丁寧な商品づくりをされている。

しかしながら、残念なことに手間暇かけてつくっていることや、その商品の背景にある物語をうまく消費者に伝えきれていないことも多い。売り方や見せ方に工夫が必要だと気づいていても、実際にはどうやっていけばいいのかわからずに悩んでいる方も多くいる。

長崎県の平戸松浦地区観光人材育成事業（厚生労働省）に関わりはじめて今年で3年目となる。8月末から基礎講座（座学）がスタートした。「目玉商品・新みやげ品開発人材育成コース」の第1回（8月20日）は、よかネット89号にも掲載した「やねだん」こと柳谷集落で行われた故郷創世塾の講師としてお世話になった森吉弘氏（森ゼミ主宰）をお願いした。

森さんは、元NHKのアナウンサー・プロデューサーとして番組制作などに15年携わり、今年の春に独立。現在は東京や大阪の大学で教鞭をとる一方、1992年（大学在籍中）に立ちあげた「森ゼミ」（自らも学びの場であることから死ぬまで無料と決めて自費で開催。「みなが先生、みなが生



参加者を相手に、実際の取材をしてみせる(左が森氏)

徒、みな正解」のモットーのもと、社会のいろは・コミュニケーションスキルなどを学び合うゼミ）の主宰として活躍されている（HPあり）。

当日は、地元協議会の呼びかけで、ものづくりに関わっておられる方約40名が来られた。日頃馴染みのあるテレビ・ラジオの制作現場の話を通じ交ぜながら、ものづくりにも共通する「特徴・ウリ・こだわりを文章に書いたり、話したり（プレゼンテーション）して、相手に伝えるためのテクニック」についてお話頂いた。

### 相手に何かを伝えるうえで大切なポイント

- ・お客さんの要求（ somethingnew : 何か新しいもの surprise : へえ～、驚き information : 情報）に応えることを意識する。
- ・ウリとなるお話を見つけるために、意識的に五感を使って取材をする。頭だけで取材しない。人は五感によって心を動かされる。その時には、わからずや になって質問することが必要不可欠。
- ・魂はディテールに宿る。日常の些細な行動や細部へのこだわりこそ作り手の魂がこもっている。絶対に何かあると思って取材することが大事。
- ・取材では、まんべんなく聞き、あたりをつける。あたりをつけるにあたっては、誰が（ターゲット）、どういう場面（シーン）で、どういう便益（利益）をうけるかが前提にないと、どういう言葉をチョイスしてよいか分からず、焦点がぼけてしまう。どういった言葉やキャッチコピーを選ぶかのセンスは、データの蓄積によって高まる（取材が命）。と同時に他類似商品の勉強も必要。
- ・売り言葉は色々あると思うが基本は、『一点突破の法則』。パラエティにとび、あれもこれもありませんでは結局何も伝わらない。印象に残らないし、商品のウリがぼけてしまう。よってお客様の心にとまらない。
- ・その他としてネーミングや言葉の選び方のポイント、しゃべりの訓練法などが大切。

以上がおおまかな内容でした。講演は3時間で、いつもより1時間半長かったが、講演終了後に参加者の中からアンコールがかかるほどの反響があった。相手にわかりやすく、かつ、魅力的に伝えるための言葉や話し方の訓練の場として、充実した時間になったのではないと思う。私自身たいへん勉強になりました。お勧めです！

(ゆきまる ひさのり)

【松浦で採れる身近な食材を使って、家庭でもつくれる、おもてなし料理講習会】

「新郷土料理・地産地消推進人材育成コース」では、JALリゾートシーホークホテル福岡の総料理長である山並辰巳氏を講師に迎え、第1回(8/27)は「地域食材を活用した料理・地域素材に着目した食による地域振興」についてお話をいただき、第2回(9/9:松浦会場)は、「地域食材を活用した料理を作る」ということで、山並さんに提案していただいた料理の実演をお願いしました。

山並さんのお話を要約すると、平戸・松浦には良い素材がある。ホテルでは、玉ねぎの皮やブロッコリーの茎はスープの出汁に、人参の葉は天ぷらにするなど食材は捨てるどころがないくらいに活用している。地域では、良い素材を市場に出荷するとともに、規定外の素材は地産地消として、地域で活かしていくことが重要である。また、お土産品として地域料理の具材を真空パックにして販売している例や、ゴルフ場の池に魚が泳いでいることで農薬を使用していないゴルフ場をアピールしている例など、食材が育まれた経緯と商品のPRの工夫も必要ということでした。

料理の実演では、松浦市で修学旅行などの体験観光を民泊で受け入れているお母さん達からは、地元の食材を活かしたおもてなし料理を教えてい



料理の下準備。早めに来た方にもお手伝いをお願いした(左が山並氏)

ただきたいという要望もあり、「松浦で採れる身近な食材を使って、家庭でもつくれる、おもてなし料理」として山並さんが料理を考案され、その作り方を実演していただきました。

料理の実演当日は、55名の参加があり、会場のスリッパが足りないほどで、席は後ろまでぎっしりと埋まりましたが、会場には手元の様子が映し出される画面があったのが幸いでした。

使用された主な食材は、アジ、対馬地鶏、人参、玉ねぎ、アスパラガス、かぼちゃ、トマト、ゴーヤ、オクラ、ハーブ、パッションフルーツ、温室みかん、梨などです。

料理について、3時間休む暇なく、次から次へと作り方を紹介していただきました。

<かぼちゃのスープ>

- ・さばいた後の鶏の骨に、人参の皮、セロリ、玉ねぎの芯や皮を入れて取る鶏ガラスープを元につくる。

<魚スープ>

- ・アジの骨から出汁をとったスープ

<鶏のロール焼き>

- ・鶏もも肉にエリンギやナス、玉ねぎを炒めてロール状にして焼いたもの

<その他素材にかけるソース、ドレッシング>

- ・玉ねぎでつくるドレッシング
- ・刺身にかけるゼリー(山芋)ソース
- ・鶏肉やいのししの肉にかけるとおいしいパッションフルーツソース
- ・お茶漬けや刺身に合う漬け込みだれ
- ・ハーブを混ぜた香草パン粉

<デザート>

- ・元気が出るにがりのジュース
- ・梨のクレープ
- ・みかんの皮をすり下ろしてソースにしたクレー



熱心にメモを取る参加者の方々

## プッシュゼット

山並さんは当初から、基本は家庭にある調味料、鍋でできるようにと言われており、クレープ用の生クリームの絞り出しは普通のビニール袋の端を切ったもので、表面をきれいに飾り付けをされていました。

終了後、参加者のアンケートでは、「身近にある食材を使ったメニューで素材の無駄のない利用方法が参考になった」「魚の骨は捨てていただけ

スープができるのだと関心した」「民泊で子ども達と一緒に作りたい」などの意見が挙げられました。

私も、素材はここまで使うことができるということと、同じ素材でもかけるソース・ドレッシングや盛りつけ方で、また違った味わいとなることを目の前で教えていただいた貴重な機会となりました。  
(あいこう みほ)

## 京築地域のブランド戦略づくり

～京築連帯アメニティシンポジウムの報告～

本田 正明、愛甲 美帆

## 【京築地域のイメージをつくろう】

京築地域では、7市町（行橋市、豊前市、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町）と福岡県で「京築連帯アメニティ都市圏推進会議」を設立している。

この会議は、京築地域が持つ「産業の力」、「文化の力」、「教育の力」と景観や情報を活かすことによって地域の総合力を高め、大都市圏ではなし得ないゆとりある居住やレクリエーション、交流、人材育成といった「アメニティ」豊かな都市圏を目指す取り組みを進めることを目的としている。

今回のシンポジウムは、特に「産業の力」を活かした京築地域のイメージづくりを進めるために、最近注目されている「地域ブランド」について学ぶとともに京築地域の魅力を再確認する場として開催されたものだ。今年度から、我々もその取り組みのお手伝いをするようになったので、その内容を報告したい。



コウノトリのスライドを説明する金丸氏

コウノトリが戻る環境づくりが農業や観光振興に波及した豊岡市

基調講演は、食環境ジャーナリストの金丸弘美氏である。以前、よかネットで三重県の「モクモク手づくりファーム」を視察に行った際、たまたまお会いする機会があった。今回の講演にも、モクモクファームやゆずで有名になった高知県馬路村や大分県の大山農協の話など、ふんだんな事例をもとに講演をしていただいた。取り上げられた事例の中で、一番印象に残った兵庫県豊岡市の事例を中心に紹介する。

- ・今あちこちで地域の見直しが始まっている。かつて条件の悪かった地域の方が圧倒的な力を持ち始めている。
- ・観光だけでなく、農業、商業など地域全体を見直して、まちの景観、観光、農業から生産加工、販売、サービス、それから教育まで連合したまちづくりをはじめている。
- ・豊岡市では、農政課の名前を変え、コウノトリ共生課となっている。コウノトリが戻ってくるために環境の仕組みを作った。
- ・田植えでは、6月に“中干し”といって田んぼの水を1回抜く作業がある。水を抜くことで、根っこに酸素を送り込んで、刺激を与えるのだが、6月に行うとオタマジャクシがたくさん死んでしまい、コウノトリのえさとなる蛙がいなくなり生態系が守れない。また、蛙は害虫を食べてくれる。そのため、蛙を死なせないよう、6月の中干しを7月にずらすなどの取り組みを行っている。



食・デザイン・物流各分野の3人のパネラー

- ・普通であれば、農家は「そんなことできない」となるが、実施するにあたり、県が1反4万円の前例のない補助金を出している。
- ・また、年配の人は「コウノトリが飛んでくると、苗を踏みつぶす」という印象を持っていたので、豊岡市ではきちんと実態を調査して、苗を踏む確率は400本に1本で影響が少ないことを伝え、理解を得ている。
- ・その結果、コウノトリのマークをつけたお米がブランド化され、1俵（60kg）24,000円で売られている。
- ・コウノトリのお米は、JAの若い職員が量販店で安売りされないように、価値をわかってくれる大阪のデパートなどに直接営業をかけ、説明して、賛同してくれたところに売るという販売手法をとった。最初は苦労したが、環境や農業の存続について共感してくれる人がでてきて、口コミで広がるようになった。
- ・豊岡市はもともと観光地ではないが、コウノトリが戻ってくることによって、観光客が48万人来ている。タクシーの運転手にもコウノトリについて学ぶ講習会を実施し、観光客に物語を語れるようにしている。
- ・コウノトリが戻ってきた田んぼでは、生き物観察、食育などの学校教育も行われるようになり、子どもたちが市長やコンビニに直訴して、学校給食に豊岡の米が使われるようになった。
- ・最近では、韓国や上海、ロシアなどから修学旅行で訪れるようになっている。

「食」「デザイン」「物流」を通じて京築地域のブランド戦略を考える

基調講演に続いて行われたパネルディスカッションでは、金丸氏をはじめ、シーホークホテルの総料理長の山並氏、佐川グローバルロジスティ



交流会ではパネラーと地元加工グループの即席相談会に

クスの正木氏、イゴス環境・色彩研究所の山口氏に加わっていただき、京築地域のブランド化について話していただいた。

まち、農村、景観、商品づくりのすべてにおいて、デザイン性を加味する重要性が増していることと、消費者の中心になっている女性が感動するものを考えなくてはいけないこと、「食」を発信していくための窓口やネーミングの重要性、顔の見える情報発信の必要性や小ロットのこだわり型の宅配などの可能性など、食・デザイン・物流など、分野の異なる方々の意見は刺激が多かった。

私自身、正直いうとこれまで京築地域に行ったことはなかった。訪れてみての第一印象は「京築は空の明るいところだな」と感じた。天気の影響も大きいですが、自分が住んでいる糸島地域は、北側に面した日本海はどこか暗く、南側の背振山地の影で冬は日が短い。京築地域は、東向きの扇状地で、四国に挟まれた豊前海はおだやかで明るさがある。食についても糸島と同じように海と山の幸がある。北九州に職場があれば、こっちに住んでもいいかなと思うくらいの魅力が京築にはある。京築のよさを発信するためにも、まずは自分が京築に惚れて自慢話を発信できるくらいにはまりたいと思った。（ほんだ まさあき）

【思いのこもった特産品が集めた交流会】

シンポジウムの後、地元加工グループが特産品を持ち寄り、シンポジウムパネラーの方々との交流会が開催されました。

加工グループの方には、シンポジウム前に交流会場にきていただき、盛りつけ準備をしてからシンポジウムに参加していただきました。達筆な字で書かれた手作りの商品説明板や営農組合がつくられたなたね油についてカナダ産、ブラジル産の種の違いを見せるなど、各団体がより商品の良さ

がわかるような工夫をされていました。

持参された特産品は、よもぎ饅頭、いも饅頭、おこわ、柚子かるかん、柚子味噌漬け、柚子ドレッシングをかけたサラダ、手づくりこんにやくを使ったヘルシーハンバーグ、シフォンケーキ、プリン、ジェラート、なたね油、ケーキに使用される桃やブルーベリー、漁師仕込みの魚と野菜の南蛮漬け、かき揚げなどでした。最初に、各グループの方から商品の説明や作っている思いをそれぞれ発表していただき、皆で試食をしました。

試食の間、加工グループの方々はパネラーと熱心にお話をされていました。

京築地域の特産品は、11月に行橋市で行われる「文化と食の祭典（シンボルイベント）」、12月には福岡市天神の警固神社での「京築フェア」で一同に販売が予定されています。地域内には32の神楽講があるという特徴から「神楽ライブ」も実施されます。お近くの方、ぜひ足をお運びください。（あいこう みほ）

## 観光と修行 四国の遍路道を歩きながら考えた

### 四国遍路の地域経済学・提言……遍路報告第2回

糸乗 貞喜

#### 【四国遍路の魅力】

四国には遍路風土という“気”が満ちている。昔からの時空を越えた、人々の心と自然（風土）の積み重なりがもたらしたものである。それにふれたい人は、地域の人々とふれあえる遍路道を、遍路装束（完全でなくても）という通行手形を着て歩き始めればよい。そうすれば“へんろさん”という小学生の声や、地域の人たちの心とふれあえる。それは仏教とか神道というようなものを超越した、四国の人たちの遍路を大切に土地柄の世界である。この世界へ、もっとたくさんの方がふれやすいような仕組みを考えたいということが、この提案の趣旨である。

#### 【提言内容】

- 1、修業はもちろん原点だが、もっとゆとりを持った、楽しみながら廻る遍路旅が出来ないか
- 2、観光の要素を取り入れて、地域経済への寄与度を高められないか
- 3、企画を広げて、多様な旅を計画することによって、観光バスの人たちにも“歩き遍路”の楽しさを味わって頂けないか
- 4、そのため、当面、市場調査・旅の企画設計などをするチームが出来ないか

以下の文章は、私が歩きながら考え続けた、私なりの主観に基づいた「仮説」を元に提案するものである。

四国遍路は、少しガンバリすぎ？

社寺仏閣を訪れるといえば、まず、観光というイメージがわいてくる。昔から宗教は、その施設の維持などにかかる仕事を生業とする人以外は、アソビ（金儲けではない活動）であった。そのアソビの幅は広く、心の修業であったり、飲食などの慰楽であったりした。

富士山に登る人は、「一度は登りたい」という心の満足感を求めている。そのために高山病などとも戦い苦行をするが、帰りには山麓の温泉などで身体をいやした。高野山には、弘法大師にあやかりたいという心を持って訪れるが、帰りには麓の町で精進落としという楽しみがあった。

甘肅省のチベット寺院で、大きい御堂を五体投地をしながら廻っている女性をみた。この人には

慰楽という要素はありそうになかった。しかし、ある程度豊かになった地域では、江戸時代の富士講、伊勢講、大師講も、「御師」などといわれる人たちのマネージメントを介しており、観光産業と結びついてきたと考えられる。そういった感覚で見た場合、四国の遍路旅は、少しピューリタン過ぎるように見えた。

四国遍路さんは、何に期待し、何に充実感を持って帰って行くのだろう。それは次の点に表されると思う。

#### 【魅力】

a . お接待

特に小学生の「へんろさん」と声をかけてくれる挨拶

マチやムラの人たちが、かけてくれる挨拶

歩いている時やバスの中などでの、地域の人の会話

- b. 地域の人に信頼されているという雰囲気  
この前提は遍路装束にあると思う。その形を含めて、土地の人々との信頼感が生まれ、四国遍路独特の「包まれているという空気」を醸成する。

では、このような魅力はどんな時に期待できるのか。それを、私の体験であげてみると、次のようになる。

【魅力を感じる場】

- a. マチやムラを歩いているとき  
b. 札所で声を掛け合うとき  
c. 無料接待所などで休ませていただくとき  
d. バス停、バスや電車の中で声をかけられるとき  
e. 雰囲気のいい納経所に出会ったとき（忙しい事務的な納経所が多い）  
f. 登り降りの難所で声をかけたりして、気遣いをしていただくとき  
g. 上記に、風景も含めていえば、四国の遍路風土に出会う、ということが出来る

四国遍路は一つの居場所である。それを分解した「時空」が上記の場だと考えられる。この場＝一人ひとりの居場所、四国の人びとや遍路が共有する居場所が、四国遍路の眼目ではないのかと思う。

四国の巡拝者は20万人ぐらいといわれ、そのほとんどが観光バスなどでの参拝で、歩き遍路は3000人程度と見られている。“場”の要素を思い浮かべながら、団体巡拝の魅力を私が書きえないことに気づいた。しかし、観光バスの中には小学生の声は聞こえない。途中にたくさんある、無人の接待所に止まるわけにはいかない。

また、歩き遍路の場合でも、歩く道路の多くは、地元の人が全く歩かない国道・県道であり、そこでは上記のような交流は考えられない。

初めての遍路旅の中で、ある民宿の女将さんに「糸乗さんも遍路病になって毎年来るんじゃないの。もうなってるかな」といわれた。

“居場所がない”が、現代の最大のテーマになってきている。秋葉原で起きた犯罪も、それに追隨した犯罪もそれがベースにある。

老人医療問題の中で「我々に死ねというのか」などとすごむ高齢者がテレビに映っていた。この人も、自分の居場所がない、無くなる、という不



遍路の装束。金剛杖、箕傘(ビニールカバーがついている)、頭陀袋(納経帳、数珠、線香など)、白衣、このほかに輪袈裟。

安がベースになっているのだろう。私などは“まだ生きろというのか”などとギャグを飛ばしたいぐらいだが。

遍路病という“居場所”

ずっと歩いて廻り続けている人もいた。まさにこれは四国を居場所と定めた遍路病であろう。「死ねというのか」とすごむ人より、また世間の多くの人より、はるかにいい顔をしていた。そんな顔を見ると、女将さんの言うように「遍路病になってもいいかな」とも思った。

しかし現在の遍路では、多くの人が“遍路病”になる機会を逸している。四国を廻っている人たちのタイプを分けてみよう。

【遍路さんのタイプ】

- a. 観光バスなどで、88ヶ所の札所を廻って納経し、御朱印を戴く  
b. 全部歩いたと、自分に納得させること  
c. 四国遍路の雰囲気に包まれること

aの人たちが一番多く、20万人と見られている。観光バスでしか巡拝できない人がおられる。体力や時間的要因で、歩いて廻るほどの“贅沢”は出来ないという人たちだ。道路ができて、観光バスが行けるようになったということは、身体の悪い人でも巡拝できるので、大変よいことである。

私が歩いている中で「全部歩いたかどうか」に拘り、歩いたところまでタクシーで行って、歩き繋いだりしている人がいて驚かされた(ほとんどの歩き遍路が、これを当然だと思い、遍路宿の人にも歩き繋ぎのサポートをしていた)。また、何度も歩いている人でも、「国道に行く方が道もいいし、勾配がないので楽だし、早く行ける」といって、しきりにアドバイスをしてくれた。「何日で全部歩いて廻ったか」を気にしている人もいた。



旧宇和小学校、廊下の長さ109メートル

私は、歩き始めて4～5日で「これは私の気分には合わない」と思って切り替えた。時間が上手くいけばバスや電車を利用することにした。地元の人たちは毎日遍路をやっているわけではないので、普通の道を歩き、バスや電車も利用している。バスや電車を利用すれば地元の人たちとの出会いがあるが、国道を歩いていては対話は出来ない。

四国遍路の雰囲気にも包まれるという楽しい体験を、観光バスの人たちにも味わって頂きたいものだ。

三泊四日で、四国遍路の魅力を感じるコースは出来ないか

1300枚ほどデジカメ写真を撮って来たので、4回に渡って、福岡と大阪で仲間に報告会をした。そこで50代の人から「40日でも10日でも、仕事を放り出して連続して休むのは厳しい。三泊四日ぐらいで四国遍路の魅力が分かるコースは出来ませんか」と聞かれた。また年配の人からも、「歩けるかどうか心配だから、一度三泊四日ぐらいのコースで、歩いて見ることは出来ませんか」ともいわれた。

「トラックしか通らないような所は、出来ればバスに乗り、歩くべきところは、苦しくても、時間がかかっても歩く」という遍路旅の方が、身体はつらくても楽しいのではないかと感じた。「三泊四日程度の」という質問は、私の感想に合っていた。

遍路さんのタイプでふれたが、a 88ヶ所で納経と、b 全部歩いたに拘る人が多い。どちらかというと、私のようにバスに乗るのはオチコボレと思われるようだ。若い頃にレギュラーコースから外れて、オチコボレとして生き抜いてきた私にとって、「全部歩くのが100点」みたいな価値観は息苦しい。



109メートル雑巾かけ競争。18秒38の記録は中学生。オリンピック選手も破れない。

旧宇和小学校という建物があって、廊下の長さが109メートルあると聞いて、見に行った。平屋建てのえらい横長の建物が見えてきた。ここの廊下は“雑巾掛け競争”の舞台である。18秒38の記録は中学生が持っている。中に入って長い廊下の感じを知りたいと思ったが、開館時間まで待たずに、遍路歩きに戻った。みんなが速く歩くので、私にも“急ぎ病”が移っていて、ゆっくりしたスケジュールは組めない。それでも高知市、中村市、宿毛市、宇和島市、松山市、高松市、では半日ぐらいはマチ歩きをした。ゆとり型のコースに“雑巾掛け”などが組み込まれていたら、昔がしのばれて楽しいと思う。

もともと木喰仏を探したいという気分があったのに、今回はみんなの早歩き競争に煽られる気分で、全くそちらに手が回らなかった。

全部観光バスではなく、国道を歩く完全歩き主義でもなく、遍路道は出来るだけ歩き、国道や県道はバスがあれば利用し、電車があればそれも使うという柔軟なコース設定が出来ないかと思う。

地域への経済効果は約275億円・四国遍路の地域経済学

四国遍路の地域経済への波及効果を考えたい。歩き遍路と観光バスツアー遍路の2タイプとして試算した。バスツアーの料金等は発地の業者の売り上げであり、地元に着るのは宿泊料やその他の土産代ということになる。結果は次の通りである。

【現在の地域への経済効果の概算】

A お寺へのお布施などの効果

a . 納経料等300～1,000円 平均700円

b . 遍路旅行者15～30万人 20万人

c . 一札所の収入 a x b



猪のヌタ場とは水浴びをし樹の株に身体をこすりつけて寄生虫を取るところ。樹の株がこすれて白くなっていた。

700円×20万人=1億4千万円/年

d. 四国全域 c×88札所 123億2千万円

B 地域への効果(宿泊等)

a. 宿泊観光バス等の延べ宿泊数

(一人7泊、バスの行き帰りを勘案)

20万人×7泊 140万泊

140万泊×7千円/人 98億円

b. 歩き遍路(40泊 一泊7千円として)

0.3万人×40泊×7千円 8億4千万円

C 其他一般的波及(遍路用品、飲食、土産など)

A+B a+B b の20%とみる

$(123.2+98+8.4) \times 0.2$   $229.6 \times 0.2 = 45.92$   
億円

D 総売上額の想定

A+B+C=275.52億円

団体バス巡拝は、札所の寺と、宿坊や大型の団体宿に経済効果をもたらす。一方、歩き遍路の定宿である「民宿」が営業を止めているところが多くなっている(高齢化して続けられない、後継者がいない)。問題は、遍路さんとの交流を楽しむ気があるかないかだと思うが、遍路宿に大変熱心な気持ちのよい宿も多かった。大もうけできる商売ではないが、面白いといっている女将さんも多い。一方、建設工事の関係者の宿になっていて、遍路の肩身が狭いような所もあった。

シーズンの偏りが極めて大きいということも問題である。現在の状況では、若い人が跡継ぎをしようという、魅力を感じるような評価はされていない。

バス遍路の人びとに“歩き”の魅力を提供し、歩き遍路を増やす改善案

私の思いこみかも知れないが、全行程をバスで廻るのは味気ないし、全部を歩き通すだけの体力



四国の札所は、どの寺も新築の御堂があるか、工事中かであったが、42番佛木寺には茅葺きの鐘楼があった。

が心配だ、と感じる人は多いと思う。その人たちに「今度は歩き遍路の気分を味わってみませんか」と誘ったり、「20日で廻れるコース」などの提案をすれば、観光産業の拡大につながると思う。

バスツアーの人たちの内、10%を歩きに勧誘すると、歩き遍路は4~5倍になる。

国道でもなんでも、45日かけて歩くということは、いかにもきつい。昔の人たちとの、心の交流をベースにした“20~25日コース”を作れないか。これでも民宿の経済規模は3倍ぐらいになる。

このような需要があれば、乗客が少なくて廃止になった「地域バス」の復活が可能になる。

さらに、夏休みなどに、スポーツ合宿などを誘致し、この四国の宿泊施設(インフラ)の活用を計れば、安定した地域の観光産業の基盤が出来る。

cf私は、都会のマンションで暮らしている小中学生は、春・夏で30日の林間・臨海学校を義務づけるぐらいして、行かせるとよいと思っている。多くの問題が起こるかも知れないが、それを償うに余りある効果が期待できるだろう。長崎県のある町では、20年ぐらい前から“なぎさの伝習所”という、大人が自分の職業を元にした教育をする、小学生向けの夏期学校をやっている。お寺の住職の檀家廻りに、子供が参加する伝習もあると聞いた。

体力が心配な人でも、無理なく廻れる“歩き遍路”の提案

四国遍路の魅力は、長年にわたって積み上げられてきた遍路風土に出会えることだ。となれば、魅力的なところは歩き、楽しくない国道などはバスを利用するなどして、旅行日数を短縮すればいい。私は活用できそうなところは、輪頓之術と称してバスに乗った。その経験の中で分かったことは、「バス代を600~700円払うと宿泊代が7000円少なくなる」ということであった。遍路旅が1泊減り、旅程も1日早くなる。歩くスピードは1日

30キロぐらいだが、バスは1時間で行くので、歩きとバスを併用すると60キロ/日の旅程になる。また60キロバスに乗ると、1日に90キロかせげる。こんな組み立てで旅行企画をすることとする。断っておくが、楽をすればいいということではない。12番焼山寺などは、足の悪い人でも無理をして歩いて登っていただき、降りには乗り物を利用するなどの便宜を図りたい。

20日で遍路道として楽しいところを網羅できるとして、捕らぬ狸の皮算用をしてみよう。

- a. 観光バスで四国を廻っている遍路さんに呼びかけて、歩いてみようと思う人を10%誘致  
20万人×10% = 20,000人
- b. エージェントやネット広告で、1万人集客  
= 10,000人
- c. 本企画商品の旅程は20日(20泊)
- d. 1泊7000円
- e. (a + b) × 20 × 7000円 = 4,200,000千円  
42億円

都合のいいことばかり書いたのだが、地域の小規模な遍路宿の集客規模は、8.4億円/年から約50億円に、地域の民宿の市場が5倍に広がる。

その上に、夏休みなどの需要開発をすれば、一つのビジネスとしての魅力がもてるのではないか。

企画を進めるための市場調査など

企画の前提は事業成立性調査である。以下に、簡単な項目をあげてみた。

#### 1、事業概要

事業は次の5つで構成する。

観光振興委員会の設置及び開催

旅館・民宿の経営者、札所、宿坊、観光協会職員、地元有識者、一般住民、NPO、旅行エージェント、バス会社などからなる観光振興委員会を設置し、地元の資源の掘り起こしとサービスプログラムについて検討する。

モデルコース及びサービスプログラムの設定

- ・3泊4日のコース、5泊6日のコース、20日間コース
- ・四季ごとのコース
- ・コースごとに「お遍路料理」「名物女将」「歴史探訪」「田園風景」などのテーマ別に設定する。

モデルコース受容性調査

- ・一般生活者対象にモデルコースの関心度を調査し、受容性を図る。
- ・バスツアー客対象に動機、バスツアーの評価、

不満点などを調査し、新たなニーズを探る。

- ・同時に、上記のモデルコースの事業実験としてモニターを募集し、各コースの評価を行う。
- 遍路観光シンポジウムの開催
- ・事業の可能性と情報の共有化のために関係者を対象としたシンポジウムを開催する。
  - ・モデルコースの評価、改善点などアンケート結果をもとに報告する。
  - ・取り組みによって受け入れ側の態度や姿勢にどのような変化があったかを確認する。

調査期間 約1年

(協同組合地域づくり九州理事長

(株)よかネット顧問 糸乗 貞喜)

屋外広告物について考える - 2

主要交差点における  
違反屋外広告物を撤去している  
佐賀市の取り組み

山田 龍雄

前は、福岡県の屋外広告物の規制状況、実態について報告させて頂いた。福岡県の場合「屋外広告物の半分以上が設置手続きなし、手続きをし、許可を得ているものでも基準をクリアしていない物件が相当ある」という状況であった。

一般の人は、屋外広告物といっても自分がお店を探す以外は、あまり関心を示さないものであり、相当に景観を阻害しているもの以外は、行政へもの申すといったことにはならないものである。

このような屋外広告物に対する情勢の中で、「佐賀県は徹底して違反広告物の規制を行っている」との情報を得た。今回は、平成17年10月から県条例の委譲を受け、独自運営している佐賀市の取り組みの経緯と実態を聞いてきた。

議会からの要望から始まる

元々佐賀県は、屋外広告物条例において、自己用広告物に対しては全く規制基準を設けていなかったことなど、屋外広告物行政としては遅れていた状況であった。一方、平成10年ごろから佐賀市内を中心として屋外広告物のリース業を営む設置事業者が、道路沿いや交差点周りに野立て看板を乱立しはじめ、平成13年頃から多くの市民や議会でも撤去の要望があがっていた。特に佐賀市の郊外部では建物が連坦しておらず、バイパス道路を通したり、あるいは道路拡幅した場合、道路沿いに建物を建てる際に中途半端な残地が発生する。

この残地に設置事業者（リース業者）が目をつけ、野立て看板が多く建てられてきたらしく、他都市に比べたら屋外広告物の件数が多いのではないかとのこと。

看板の乱立状態が続いていたものの、特別の手だてのないまま放置されてきたが、平成19年度の全国高校総体を佐賀県で行うことになったことを契機として、平成18年から佐賀県屋外広告物条例が改正され、交差点における屋外広告物の規制に踏み切ることとなった。違反屋外広告物の撤去に関しては、佐賀県と佐賀市が歩調を合わせて取り組みを始めた。すべての違反広告物を撤去できる訳ではないので、まず屋外広告物が目立ち、撤去後の効果がわかりやすいということで、主要道路の交差点周りの広告物を計画的に撤去していくことからスタートした。

佐賀市は、市内に主要な路線を特別交差点区域路線（国道6路線区間の一部、県道10路線区間の一部、市道10路線区間の一部）と定め、その路線区域内の主要な交差点を特別交差点と定めている。

規制のかかる範囲は次図に示す通りであり、交差点周りの結構広い範囲にかけられている。

2年間で159件を撤去

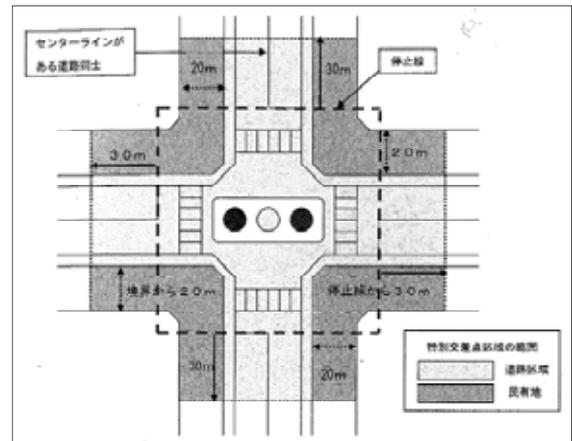
この事業は平成18年8月頃からスタートし、佐賀市では昨年までの2年間で11箇所の交差点周りの違反屋外広告物159件すべてを撤去、佐賀市市外の主要都市では土木事務所が中心となって85箇所以上の交差点における違反屋外広告物を撤去したと、県は目標の9割近くを達成している。

私は「元々違反広告物であるが、既に建ってしまったものを撤去するといえば、必ず設置事業者や広告主から相当な抵抗がある。このようなことを良く実践されたと思うが、実際に、どのように説得されたのでしょうか」と素直に担当者に聞いてみた。

担当者からは概ね次のような説明があった。

- ・最初は、設置業者や管理者に対して説明に行くけれど、なかなか納得していただけない。なんとか根気よく説明するが、あまりにも市は独断的ではないかとのクレームがあるのも確かである。
- ・しかし、市としては市民の後ろ盾もあり、なんとか美しい景観を作りたいという思いを伝える。
- ・どうしても納得しない設置事業者に対しては広告主の方に連絡し、そのままの違反の状態が続くと広告主の名前を公表することになるという

特別交差点区域の範囲



と、だいたい撤去して頂けるとのこと。

つまり広告主としては、まさか条例違反の広告物とは知らないで、リース業者と契約している訳であるので、業者として広告主を騙したこととなり、広告主の言うことを聞かざるを得ないものと思う。

- ・いままでのケースでも違反者の公表をしたのは2件だけとのこと。
- ・問題は、屋外広告物を設置する場合、だいたい土地は借地しているため、その所有者の説得も必要になってくる。これについては行政側はタッチしていないが、設置事業者が説得しているようであるとのこと。

とにかく、撤去を勧告・指導し、実際に撤去に至るまでは、9ヶ月を要するようで、大変な労力である。

条例に違反しているので、撤去も自己負担という措置で対応させているから、設置事業主や広告主及び借地所有者を説得するのは膨大なエネルギーを要するものである。

担当の方は、根気と勇気をもって良く対処しているものと思う。

今年度は特別交差点4箇所の違反屋外広告物の撤去を目標としている。現在、佐賀市の場合、専属の担当者2人で対処しており、年間に4箇所しかできないというのが実態であろうと思う。

市民と一体となった違反屋外広告物撤去の活動前回のレポートに屋外広告物を管理していくためには、相当なマンパワーが必要であることを記述させて頂いた。具体的には行政も町内会や景観に関心のある団体と連携していかないと違反広告物の撤去、管理をカバーできないことも記述させて頂いた。しかし、佐賀市では既に市民との連携



撤去例 交差点における撤去前の乱立した野立て看板



撤去後、すっきりしたが少々寂しくなった交差点



撤去例 横幅広く看板が占め、背景の木々が隠れてしまっている



撤去後、緑豊かな木々がみられ、すっきりした交差点

を考えた「佐賀市路上違反屋外広告物撤去活動制度」を平成17年の10月から施行している。

現在、商店街組合、自治会、PTAなど19団体、約160人が加盟し、2ヶ月に1回程度の頻度で活動している。活動の主な内容は違反広告物のうちの簡易除却対象物である「はり紙」「はり札」「立て看板」の除却を行っている。

発足当時は30団体程度が加盟していたが、一時のヤミ金融チラシなどの看板が減ったこと、また、市囑託の2人が日常的に簡易広告物の除去を行っていることから、地域によってはボランティアの必要性が薄れてきているため、加盟団体も減っているのではないかとのことであった。

市民ボランティアとしては簡易広告物の撤去もあるが、すべての違反屋外広告物を見つけ出し、届けるなど、市民同士で見守っていくような体制づくりが必要のように思う。

設置事業者との知恵比べ

現在、佐賀市が取り組んでいる特別交差点区域内においては、野立てのリース広告は禁止となっ

ているが、自家用広告物<sup>1</sup>及び管理用広告物<sup>2</sup>については許可対象となっている。

この許可基準を逆手にとって、唐津市内では交差点に面した敷地に細長い小屋みたいな事務所又は倉庫を建てて、そこに広告物を設置しているものがでてきているとのこと。

いずれ佐賀市内にも、同じように条例基準ぎりぎり抵触しないような広告物がでてくるのではないかと担当者の方は危惧されている。

広告主と倉庫や事務所利用として契約書があれば、実態として使用していなくても自己用と見なされるらしく、なかなか違反物件ともみなしにくとのことである。行政と設置事業者の知恵比べと、イタチごっこの様相を呈している。

1：自己の氏名、名称、店名もしくは商標又は自己の事業もしくは営業の内容を表示するため、自己の住所又は事業所、営業所もしくは作業所を表示する広告物

2：自己の管理する土地、物件に管理上の必要に基づき表示する広告物

## 違反屋外広告物撤去活動制度の概要

認定団体の要件等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商店街組合、自治会、PTAなどの団体の構成員等で2ヶ月に1回程度の活動ができる人</li> <li>・認定期間は認定の日から1年を超え2年以内の期間における11月30日まで</li> </ul>
撤去活動員の任命等	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認定団体の構成員各人（18歳以上）を撤去活動員として任命</li> <li>・任命に際して佐賀市役所において身分証明書と腕章の交付、あわせて撤去活動の説明</li> <li>・撤去活動の任期は、団体の認定期間の末日まで</li> <li>・撤去活動員についてボランティア保険を掛ける</li> </ul>
撤去活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・原則として事前に提出する計画書に従い撤去活動の実施</li> <li>・身分証明書と腕章を着用し、2名以上で実施</li> <li>・撤去に要する道具（ヘラ、ニッパー）は、市が貸与</li> <li>・トラブルが発生したときは、活動員だけで処理をせず、佐賀市役所に連絡</li> <li>・撤去活動を行ったときは、撤去場所撤去して広告物の種類、数量、参加人数等を直ちに佐賀市役所へ連絡</li> </ul>
撤去広告物の処分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・撤去広告物が「はり紙」の場合は団体で処分</li> <li>・撤去広告物が「はり札」「立て看板」の場合は市役所に搬送するか、佐賀市が回収に伺う。</li> </ul>

## 今後の方向性？

写真でもわかるように主要な交差点は、広告物が設置されてなく、すっきりした景観になっている。

今後は野立て広告があった場所を緑地帯にするなどの方策の検討も考えられるが、予算との関係もあり、市民も巻き込んで交差点のあり方を考えていく必要があると思う。

佐賀県、佐賀市の違反広告物撤去の取り組みは、市民や議会の応援と市担当課のやる気があるからこそできるものであり、普通の自治体では腰が引けようなものである。

しかしながら、既存不適格の物件に対して対処していくため、市民のバックアップがあれば、市及び担当課としても思い切った活動ができるのではないと思う。

今後、10数年を要するかも知れないが、佐賀市の主要な道路沿いの街なみ景観はかなりすっきりとなり、美しい街並みが形成されているのではな

いかと思うとともに、現在の苦勞が大きく評価されるのではないだろうか。

（やまだ たつお）

高齢者の安全・安心の住まいを  
ボランティアで支え続けて14年  
～高齢者住宅環境整備ボランティア会～

山田 龍雄

今年の4月、福岡県宗像市では市内の建設関連業者、不動産事務所、商工会、子育てネットなどの地域支援のボランティア団体などが一緒になり、地域で住まいや暮らしの面で困っていることは自分たちで解決し、将来的には事業化も視野に入れた任意団体「住マイむなかた」を立ち上げた。

現在、市が実施していた住宅相談サービスを、この団体が受託し、相談事業を実施している。さらに、今後、「住マイむなかた」がどのような活動をし、事業化していくのかを研究するため、4つの研究会（居住関連サービス研究会、元気むなかたハウス研究会、あんしん賃貸支援研究会、あんしん住み替え研究会）を組織し、月1回のペースで話し合いが行われている。私は、一昨年に県の自主研究事業「高齢者の住み替え支援事業」を受託し、宗像市の「日の里団地」を対象として、主に空き家活用の可能性についての基礎的な研究をさせていただいた。そのご縁で、今回の研究会のひとつである「居住関連サービス研究会」にアドバイザーとして参加することとなった。

大分県、日田市を経て連絡先を知る

研究会のアドバイザーとなった関係もあり、住まいのリフォームや暮らしのサポートなど、居住関連のサービスを地域で自主的に行っているグループがないものかと気にかけていた。そのような時期に大分県に行く機会があり、一昨年、大分県の住宅基本計画策定のときにお世話になった人に、この居住関連サービスの話をすると「日田市の設計事務所の人で、ボランティアで住宅リフォームをやっている人がいる。簡単なリフォームでは材料費だけで行っているようだ」ということを教えて頂いた。すぐに日田市の住宅課に電話をして「市内で住まいのリフォームをボランティアで行っている人がいるらしい。連絡先を教えてください」と問い合わせると、「ああ、それはヒグチ設計のことですね」と教えて頂いた。

工事費用は工事の内容と相手を見て決める

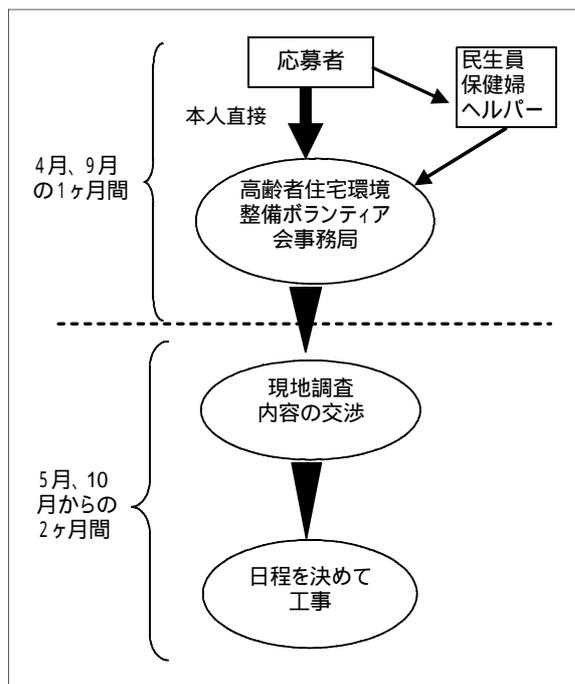
JR日田駅から歩いて数分のところにある設計事務所でお話を伺った。

ヒグチ設計代表の樋口さんは、親の介護をし、その後亡くなったあとに、ビジネスではなく、高齢者の方に貢献できるような活動ができないかを考えていた。そこで付き合いのある建築関連業者（左官工事、電気工事、塗装工事など）に声をかけ、平成7年に18業社で、この団体「高齢者住宅環境整備ボランティア会」を立ち上げられた。現在の会員は20業社と、設立当初とほとんど変わっていない。

この団体が13年間に実施してきたリフォーム件数は約700件であり、年間概ね50～60件行っている。地域の新聞や市の広報誌に、4月と9月の1ヶ月かけて募集・受付を行い、その後2ヶ月間で会員と応募者の日程を調整し、リフォームを実施するといった流れになっている。

応募条件、工事内容、工事費用の概略は次表のとおりであるが、ユニークなのが料金システムである。ボランティアといっても材料費すべて無料では運営に支障を及ぼすこととなるので、どのようにされているのかは気になるところである。何か内部の規則みたいのものがあるのだろうかと訪ねると「基本的にマニュアルは存在するが、先方の事情、生活状況もある程度把握出来るので、料金を支払って頂けるのかどうかわかります。それ

応募から工事までの流れ



とスムーズに開け閉めできなくなった襖や障子などで飽で1～2回こすって直せるような簡単な工事は、料金は取っていません。これは全くのボランティアです」と回答が返ってきた。要は負担出来る人から実費を頂き、その他については無料を原則としている。

数年前までは会員から月1万円、年12万円の会費（現在では月3,000円に値下げ）で運営し、材料費の支払えない人には、会員の会費から材料費まで支給しているそうだ。

費用のことをいろいろ聞いていると樋口さんは、「人間もいろいろな人がいるのですね。金を持っている人ほど、出したがらないようなこともあります。立派な家に住み、変に知識がある人からは、『おたくがボランティア団体というから頼んだのだ。ボランティアというのは無償でやることではないのか』といて、どう見ても支払い能力はある人には半額程度のルール）を渋る人がいる」とのこと。今ではこのようなことを言う人は長年の経験でわかるらしく、応募した家に伺って、丁寧に断りするそうである。

「この活動が、大きなリフォーム工事や家の建て替え工事につながるようなことがあるのではないのか」と、もう一つ気にかかる質問をしてみた。「会員の中には、その後ちゃんと個々の工事を頼まれてやった人もいるらしいが、全体としては、ビジネスにつながるような例は皆無に等しい。」とのことである。

住まいボランティアの地域適正規模とは

樋口さんは「現地に出向いて家の診断をし、工事をするようなボランティアをするには、地域の適正規模があるのではないかと」言われた。結論を言うと「人口10万人前後で1時間程度で現場に行けるような範囲の地域が適正でないか」ということである。あまり人口が少なく、高齢化している地域ではニーズはあるだろうか、建築業に係わる専門業者も少ない。その点、日田市では、人口74,000人であり、周囲の町村を合併したものの、市域内であれば、だいたい1時間で行けるような地域エリアであり、また、建築関係の専門業者もそこそこいる地域である。

利用者は単身高齢者約7割、工事の内容では建具、屋根工事で約4割弱

この団体が、これまでの利用状況を集計されたものをみると、次のようになっている。

## 高齢者住宅環境整備ボランティア会 募集要項

## 応募条件

- ・日田市在住の65歳以上の高齢者の方で単身者及び高齢者のみの世帯

## 工事内容

- ・軽微な改善、修理、その他（電話を使いやすいように、部屋を明るくする電灯の取替等）

## 工事費用

- ・材料費実費程度は申込者負担  
（支払い可能な方については人件費半額程度を負担して頂く場合もあります）

- ・応募者は76歳以上が6割、単身者が約7割
- ・申込み方法は、本人から直接が約74%であとはヘルパーさんが約18%と約2割近くある。これはヘルパーさんを通じた介護保険対象となるリフォーム依頼もあることも要因である。
- ・費用負担は、全額負担（材料費実費、人件費半額の4,000円）は1%（6～7件/708件）、一部負担（材料費実費のみ）は約68%（約482件：年間平均約37件）、無償（支払いが困難と認められた場合及び軽微な工事で当会で負担）31%（約220件：年間平均約17件）

この最後の無償が約3割もあるのは驚かされる。これは、軽微な工事をはじめ会員の無償奉仕と会費の積み立てによるところが大きい。

工事の内容をみると、建具工事（サッシ、建具、襖、網戸取り付け工事等）が約21%、屋根工事、雨漏り修理、塗装等）が16%、次に木工事（床、壁、天井の修理等）が11%、雑工事（廊下、便所、浴室の手すり、段差解消等）9%となっており、バリアフリーに係わる修理は1割程度であり、雨漏りや建具の開閉など逼迫した要望が多い。経済的な理由もあって、なかなかバリアフリーの工事に手が回らないのかも知れないと考えられる。

組織を長く続ける秘訣は例会を続けること

平成7年から活動をはじめて14年目であるが、これまでに会員数はあまり変わらず、当初メンバーが半分残っている。

樋口さんは「この組織が続いているのは、先ず目的がはっきりしていることと、毎月の例会を欠かさず続けていることが大きいと思います。この団体の例会は月1回、朝の7:00から朝食を食べながら行っています。夜の会議にすると仕事の都合で出られない人が出てくると、会議終了後は

飲み会となって出費も重なるので、どうしても参加率が落ちてしまいます。そこで朝の会議であれば、どうせ朝飯は食べないといけないし、少し早起すれば参加できるので参加率がいいです」と言われた。私も、11社が加盟している協同組合（地域づくり九州）に加盟しており、例会を必ず行うという話は納得のいくものであった。何もこれといった議題がなくても、必ず定期的集まって、顔を付き合わせて情報交換や相談しあううちに、親睦が深まり、新たな事業化の話が生まれるかも知れない。

## 田舎住み替え支援事業へのチャレンジ

樋口さんは、また新たなビジネスに挑戦しようとしていている。日田市の山間部では、空き家が増えてきており、この空き家を活用して、都市の人を日田市に移住してもらうため、住宅や暮らしの面でのサポートをする事業を始められた。今年度、大分県から「移住交流地域連携事業」に選定され、空き家調査や計画づくりを進めているとのこと。

「何か機会があれば、山田さんと連携してやりたいものだ」と言って頂いたが、私としては他都市の事例の情報提供、あるいは知り合いを日田市に紹介することなどのお手伝いができればと思っている。

ヒアリングをさせていただいた時間は約2時間ぐらいであったが、非常に濃密な時間を過ごさせて頂くとともに、これからの宗像市の居住関連サービス研究会の活動にも良いヒントを頂いたと思った。  
（やまだ たつお）

## 近況

## 練馬区の農家レストランみやもとファーム

焼き肉を食べることができる農家レストラン「みやもとファーム」

先日、埼玉県新座市に出張する機会があり、昼食は練馬区高松の農家レストラン「みやもとファーム」に連れて行ってもらった。

このレストランでは、店舗のすぐ横に農地が広がり、「ここが東京23区内だろうか」といったのどかな風景の中、目の前の畑で採れた新鮮な野菜と焼き肉を食べさせてくれる。普通、農家レストランでは、地域の伝統的な農家料理や創作料理、イタリアンなどが多いと思うが、「農家レストラン」と「焼き肉」という組み合わせが新鮮。



レストランと農園が隣接している。右がレストラン、左が農園。

この店のオーナーはもともと農家で、通常の流通ルートに乗らない（定型ではない）野菜を消費したいというニーズからスタートし、オーナーの人脈で米沢牛の畜産農家と協力して、美味しい肉と新鮮な野菜を食べさせてくれる焼き肉屋さんが誕生したそう。お肉も野菜も美味しかったが、個人的に一番気に入ったのが、各テーブルにビアサーバーがついていて、冷えたビールを、自分が好きな分だけ飲むことができるというなんとも嬉しいサービス（ただし、飲み放題ではなくグラム売りなので、飲み過ぎには注意が必要）だ。この農家レストランの仕組みは、福岡市から公共交通を使って行くことができる郊外（早良区・南区・糸島近辺）であれば、十分に成り立つような気がした。

都市住民が授業料を払い、耕させてもらう「練馬体験農園」

レストランでの食事後は、練馬区職員の井上さんに、みやもとファームの体験農園を案内して頂いた。練馬区の体験農園は、井上さん曰く「野菜作りのカルチャースクール型」だそうで、その仕組みは、以下の通り。

- ・体験農園は、三大都市圏特定市の「生産緑地」を対象とする。
- ・練馬区で第1号の体験農園がオープンしたのが平成8年。現在では、こういったタイプの体験農園が13園あり、着実にその数は増加している。
- ・生産緑地は指定後30年以上農業経営を継続していかなければならず、後継者がいないからといった理由で農業を継続していかないのであれば、莫大な相続税を払わなければならないというジレンマに陥った。
- ・そこで、農業者が練馬区の担当者と共に智恵を絞り、平成8年に「農業体験農園」を実現させ



掲示板には、注意事項等の他、バスツアーなどのサークル活動情報も書かれていた。

た。

- ・「市民農園」は、割り当てられた区画を利用者が自由に耕すが、体験農園では、農家が栽培品目を決めて栽培計画を作成、講習会を開催。
- ・農家の耕作指導のもとに、利用者は割り当てられた区画で作付けから収穫までの農作業を行う。
- ・利用料は、練馬区民以外は1区画30㎡あたり4万3千円。練馬区民であれば区から補助金が出るため、年間3万1千円となる。
- ・利用者が農家に支払う利用料の中には、講習料と、収穫した農産物の買い取り料が含まれている。買い取り料は前払いであり、不作の場合も払い戻し等はない。

井上氏によると、農家の収入は、自ら耕作した場合の年収とほぼ同じくらいになるそう。また、生産緑地の固定資産税は農地課税であり、年間数千円。相続税も農業を継続することを前提に納税が猶予される。農家にとっては、都市住民を雇って畑を耕してもらい、なおかつ作物を前払いしてもらい、指導に対する謝礼までもらえるという、メリットの大きい仕組みである。

また、利用者は、地元農家による丁寧な指導を受けることができるため、失敗も少なく、手軽に野菜作りを楽しめる。しかも、スーパーで購入するよりも安く新鮮な野菜を収穫できるうえ、体験農園を通じてコミュニケーションが広がる、といったメリットがあるそう。

リピーター率は9割を超えるとのことで、満足度は非常に高いことが伺える。体験農園の休憩スペースには、農園仲間へのサークル活動のお誘いなどのメッセージが書き込んであり、ほのぼのとした雰囲気である。

大都市近郊での農業ビジネスを複合的に展開このみやもとファームでは、農家レストラン、

体験農園の他に、レストランの店先では野菜の直売も行っており、都市近郊での農業ビジネスを都市住民のニーズに応じた様々なスタイルで実現している。平日の早朝に農作業を楽しんでから出社するビジネスマンもいるらしく、大都市に住みながら農ある暮らしを楽しむというライフスタイルが徐々に広がっていると感じた。

この練馬区体験農園の取り組みは、安全・安心な食や、農ある暮らしへの関心がある都市住民にも願ったりかなったりの制度であるし、大都市における農地の存続のためにも有効な仕組みである。

(原 啓介)

初盆に家の前庭で、集落の人々が盆踊り

私の女房のお母さんが昨年8月中旬に亡くなり、今年のお盆が初盆となった。

義理の母が仏様となって位牌が安置されている家は、福岡県添田町の英彦山の麓の「一の宮」という集落にある。この集落は、英彦山に向かって谷筋の約6kmに及び細長い地形をなしており、その登り口に熊野神社が鎮座している。この道は、過去には修験者が歩いた道であったともいわれている。この修験道伝説との関係があるかどうかはわからないが、この集落での子供、大人が一緒になって初盆の家を回り、その家の玄関先の前庭で盆踊りを踊ってくれるという行事が長年続いている。義理の父が亡くなったときにも体験したのであるが、まだ、このような盆踊りの行事が続いていることに感銘を受けた。

最近では、車で移動するので1日で終わるのであるが、女房が小さい頃(40数年前)には、歩いて移動しないといけないので、初盆のところが離れていると2日にわけて行っていたという。

女房の実家の当主である長男さんは、現在は北九州市に住んでおり、実家の維持のため月2回程度帰ってきているが、この盆踊りの受け入れのため親族の中心となって準備をされた。盆踊り隊を迎えるため、前庭へ明かりを灯す仮設電球の設置、子供たちの手みやげ用のお菓子の袋詰め、踊りの合間にのどを潤す冷えた飲み物やスイカなど準備しておかなければならない。

盆踊り隊は夜も少し更けた8時過ぎに前庭に到着した。人数は大人約15人、子供約15人のだいたい30人程度であった。子供の中には中学生、高校生とおぼしき人も5~6人ぐらいいた。

到着すると、カセットテープの音楽に合わせて3曲、肉声で2曲、あわせて5曲ほどを踊って頂



前庭で輪になって盆踊り



休憩時に飲み物、スイカ、お菓子などで御接待

いた。炭鉾節の時には、私が唯一踊れる曲なので、輪の中に入って一緒に踊らせていただいた。

私は焼酎係を仰せつかっていたので、ビールを出したあと、頃合いをみて焼酎の水割りを数人の人にサービスした。

確かに、このような行事を維持していくのは盆踊りを提供する方、受け入れる方どちらも大変である。しかし、私は、地域の人々のつながりの確認、親睦を深める風習として非常に大切な行事であると思う。

この辺の集落も少子高齢化が進み、空き家も増えてきており、このような伝統的な行事がいつまで続くかわからない。しかし、個人の身勝手な思いとしては、このような盆踊りが何とか維持し続けられないかと思う。

蛇足であるが、当社の朝会で、この盆踊りのことを報告した。筑豊出身の私も小さい頃は、初盆の家に盆踊りをしながら街なかを練り歩いた覚えがあるので、所員それぞれに「君たちの田舎には盆踊りがあるのか」と質問してみると、鹿児島大隅半島出身のもの、お父さんが人吉地域出身のものとも「そんな盆踊りはない」との返事。

私は、このような盆踊りの風習は九州一円で

われていたのではないかと勝手に思いこんでいたので、これには少々びっくりした。いずれにしても盆の時期にご先祖様を思い出し、地域のつながりの絆を確認するといった行事は、どこの地域でも違う形で行われているのであろうと思うが、このような先祖供養の行事が徐々に失われてくることに一抹の寂しさを感じるとともに、各地域の初盆の行事のことを記録（ビデオ、写真、文章等）として保存しておくことも大切であるように思った。（山田 龍雄）

全国のオチコボレ青年諸君、人に喜ばれる仕事をして、自立しよう

高齢者と若者の心をつなぐニュービジネスづくり

【“思い出カプセル(株)” 発足準備中】

よかネット4月号に書いた糸乗の提案に、かなり反響がありました。私の意図をもう一度簡潔に書いてみます。50~60才代の人から次のようなことを聞きます。「私の祖父母のことを、親からほとんど聞いていない。曾お祖父ちゃんなどのことも知りたい。私ってどこから来たのか」年寄り、子や孫に、財産は残せなかったが、「ふる里のことや自分の生きてきたことを伝えておきたい」という。葬式とお墓は簡素でいいが、自分のルーツや思いを何とか残す方法はないのか。葬式と墓で4~500万円かかるといわれている。そちらはお金をかけたくない。葬式用の写真だけでも10万円かかると新聞に出ていた（出張は別途経費を）。

こんな声に対して、インターネット上に“思い出カプセル”をつくっておいて、DVDやプリント製本にも応えようということを考えています。

【カプセルの内容】

1、トピラ 思い出写真で構成

本人の近影

故郷のスナップで構成 ex生家、街並み、小川、山、花etc

2、本人の弁 何を、このカプセルに残したいか

文章で10行ぐらい

顔を写しながら、2~3分のひと言

顔写真を出して録音を入れてもいい

3、ふるさと・家族の話

ふるさと自慢 写真

家族 集合写真 スナップのレイアウト、結婚式の集合写真

親族の集合写真 昔の写真もあれば ex戦前

の、印刷物のコピーでも

幼なじみ 写真ex同窓会、小・中学校の卒業写真

今まで住んだ土地の写真

4、自分の生い立ちと人生 インタビューで20分ぐらい収録

ポイントは、どれだけ優しく、楽しくインタビューが出来るかです。カプセルをつくる人が楽しいものでないと（お客様がいい気分でない）よい思い出を込めることが出来ない。

現在カプセルの見本を糸乗モデルで作成中。内容は上記の通りで、近く糸乗のホームページに公開予定。

“思い出カプセル”をつくりたい方、この事業に参加したい方は、糸乗のメールへ連絡下さい。

itonori@mue.biglobe.ne.jp ケイ1080-5245-2477

（糸乗 貞喜）

京都をぶらり

嫁さんの実家が京都ということで、お盆にはよく帰省するのですが、お寺や神社の大好きな私にとっては、ほとんど観光に行っている気分です。あまりにもしょっちゅう行きすぎて、最近では冷たい視線を感じてしまうので、今回の帰省では、街の様子をぶらりと見てきました。

ただポーと街を歩くのも芸がないので、「京町屋」をテーマに見てまわることになりました。

京都で一番にぎやかな場所は、四条通といわれるところ。「祇園さん」で有名な八坂神社の門前町にもなっているので、観光客やら学生やら地元の客などがわんさかいます。そこから一本北にある通りが「京の台所」錦市場です。そこからさらに北にいくと三条通になりますが、このあたりに町屋を活用したお店がいっぱい集積しています。

京野菜を使った「おばんざい」のお店やカフェ、ギャラリーなど、いろいろあります。若者に人気のブランドショップの店舗まで町屋なのは驚きました。聞いたところでは、ここ数年の間に、三条通周辺に町屋を改装したお店が増え、オシャレな人たちが歩くストリートになってきたとのこと。よく見ると、観光客よりも着物姿のカップルなど、地元のお客さんもよく見かけます。

福岡でも、大名や今泉などの住宅街にポツポツとオシャレなショップがあり、自分のお気に入りの店舗を何軒か見て回ったりしますが、京都でも似た展開になっているようです。

京都だからといって、特に特殊な町屋がある



町屋カフェの入り口。暖簾にも名前がないので知らない  
とまったく気づきません。

わけではありませんが、町屋の連続した風景が、1本の通りだけでなく、暮盤の目状に面的に広がっているところに京都の深さを感じます。ただ、町屋を活用した飲食店や喫茶店なども増えていますが、派手な看板を掲げたチェーン店などもちらほらみかけました。京都の町屋の歴史や文化をうまく読み解いて、長続きする取り組みがもっと増えてほしいなと感じました。

(本田 正明)

#### 富士山に登りました

8月上旬、友人8名と富士山登山に挑戦しました。いくつかの登山ルートがあるなか、山小屋の予約の関係もあり、私たちは富士宮口という最短ルートから登りました。三島駅の5合目登山口行きのバス停には、年配のグループ、ベトナムから日本に研修に来ているグループなど30人程が待っていました。

近年登山グッズは機能が向上した上、軽量化されています。私の荷物は、1泊2日の小屋泊まりなので最小限にしたつもりでしたが、年配の方は私の半分程度の荷物の少なさでした。思わず何が入っているのかおたずねしたところ、主要なものは変わらず、下山後に改めて考えると、着替えの他、私はお菓子を多く持ち過ぎていたようです。登山中はきつくてお菓子どころでは無かったのですが…。

登山口から登り始めは、雨と激しい雷に見舞われ、20分ほど登った後、新六合目で1時間ほど待機したこともあり、当初の予定を変更し新7合目の小屋に宿泊しました。夕食後、19:00頃から仮眠をとりご来光を見るため24:00に出発。いくら登山をしたとはいえ、時間が早すぎることに、またいつもとは違う状態ということもあり、私は寝入

る前に目が覚めるという状況を繰り返し夜中を迎えました。後は頭上に星空、眼下に街の夜景を見ながら頂上を目指します。途中、酸素缶と酸素タブレットを口にしながら9合目でご来光と雲海を見ることができ、8時に山頂に到着後、一気に下山しなんとか博多まで帰ってきました。

富士山は世界自然遺産登録を目指しているということで、ギョウギョウ詰めの宿泊体制やし尿の処理を自然浄化にまかせる放流式から、焼却式や微生物が分解する浄化循環式のトイレへの改善などが行われているようです。富士宮口のルート沿いの山小屋設置のトイレは一回200円を支払わないと利用できないようになっていました。頂上のトイレは最近建設された公衆トイレでこの登山ルートの中で一番きれいで驚きました。

山梨日日新聞の記事によると、別ルートの公衆トイレでは一回100円のチップの協力を呼びかけているが、協力は2～3割とのこと。今年は、過去最高の人が登山に挑戦したとのことですが、想定を上回る利用でトイレの処理や登山道整備への自治体の財政負担が大きく、環境保護のためにも入山規制や入山料徴収を検討する時期に来ているとありました。

自然を守り、より安全な登山環境にするのに私は必要なかもしれないと思います。

登山中、行き交う人は老若男女、友人グループ、小学生ぐらいの子どもを連れた家族グループ、中にはほぼ毎日一人で登っているというおじいさんと様々でした。

一度は、日本一の山にと登りましたが、元氣な友人達の一方、私は日頃の運動不足による体力のなさから最後は足下だけを見てただひたすら登り、頂上から送った家族宛のはがきの字は今にも消え入りそうでした…。いつか、もっと体力を蓄えて余裕をもって再挑戦したいと思っています。

(愛甲 美帆)

#### パソコン災難に国際連携その2

##### コールセンターという国際労働市場

以前に、パソコンが壊れて困った時、大連のコールセンターのお世話になった話を書いた(よかネットNo77、2005.9発行)。今回、「大連コールセンター就職事情」というテーマで、日本人が「日本人向けのサービスをするコールセンター」に就職した人の話があると聞いて出かけた。

「今“職”は中国にあり」という記事のコピーをみた。05年に私が大連に電話をかけた時、対応

してくれた人は、二度とも中国女性だった。当然、日本人の給料が高いので、大連で中国女性にオペレーターをさせていると思っていた。

今回話してくれたのは、大学卒業後DELL大連のコールセンターで一年半働いていた24才の格好のいい女性である。聞いていると、私が電話した時から日本人、韓国人、中国人がいたのである。日本人顧客対象のオペレーターは、3 : 2 : 5 ぐらいのようだ。同じ仕事をするのだから、男女（ほぼ半々らしい）差も、国籍差もなく、時給260円というようなことらしい。具体的な話も面白いが、私の感じたのは労働市場のグローバル化のすごさである。興味があるならば、一度話を聞く場を設けてもいいと思っている。

\* ちょっと私のきついギャグを入れる。最近“コイズミ改革でカクサ・カクサ”が流行語になっている。諸悪の根源はコイズミ改革ということが、評論家やジャーナリストの統一見解のようだ。私もそれに乗りかかりたい。

- ・コイズミ改革で日本人が、安い時給で大連のコールセンターで働かされている。許せない。大連のコールセンターを閉鎖すべきだ。
- ・ユニクロの商品は中国の安い賃金でつくっている。ユニクロ商品を禁止しなかったコイズミが悪い。ユニクロを買うような日本人は処罰せよ。
- ・あらゆる分野で外国商品の輸入が増えたのは、コイズミ改革による国際化の所為だ。鎖国にして国内だけで仲良く暮らそう。
- ・中国の安い食糧や農産物を求める日本人を処罰せよ。中国が毒餃子を輸出してくれたのは、日本人の安易さを戒めた思いやりだ。
- ・コイズミの所為で貧困大国アメリカの賃金が下がり、日本にも悪い影響を及ぼした。許せない。
- ・民営化などといって、公務員を減らすということは、消費が減って景気が悪くなることなんだ。コイズミ改革を止めさせて、早く景気をよくせよ。
- ・われわれは、80年代までは親のスネをかじってきた。90年代は国債を増やしてのんびり生きた。これからは、子や孫のスネをかじり、生き血を吸ってドラキュラのように愉しく暮らすので、コイズミ改革を止めて借金増やせ。

(糸乗 貞喜)

表紙説明

各県ごとの外国人入国者数も合わせて見てみました。福岡県では、福岡空港や博多港から年間50万人を超える韓国人の入国があるのに対し、県内の宿泊者数は30万人に留まっています。長崎県にも7.5万人の韓国人が入国していますが、そのうち6.5万人は対馬です。大分県、熊本県の入国者は、鹿児島県より少ない状況ですから、福岡に入った人が、北部九州内を回遊をしている印象を受けます。

先日、釜山 - 下関間を夜間運行するフェリーにりましたが、乗客のほとんどが韓国人でした。フェリーにはお風呂もあり、快適な環境なので、朝一番で福岡入りし、丸一日観光した後、夜間を移動時間に充てるなども可能のようです。もっと韓国人の九州旅行の実態を調べてみたいところです。

(ほ)

県別外国人入国者数

国別	福岡	長崎	大分	佐賀	熊本	鹿児島	宮崎
総数	726,615	108,595	14,445	4,008	14,596	31,760	27,018
台湾	81,455	5,946	640	3,949	923	283	11,243
香港	12,721	693	72	-	166	6,137	218
中国	49,935	11,055	557	-	315	3,758	427
韓国	509,261	75,277	12,897	-	12,895	15,587	14,700
その他	73,243	15,624	279	59	297	5,995	430

入国管理局「出入国管理統計(平成19年)」

よかネット No.92 2008.10

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号  
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋